

ヒューマノイド覇権闘争：日本の敗北と残された生存ルート

2026年10月時点の市場地形図と反転攻勢への戦略的ピボット



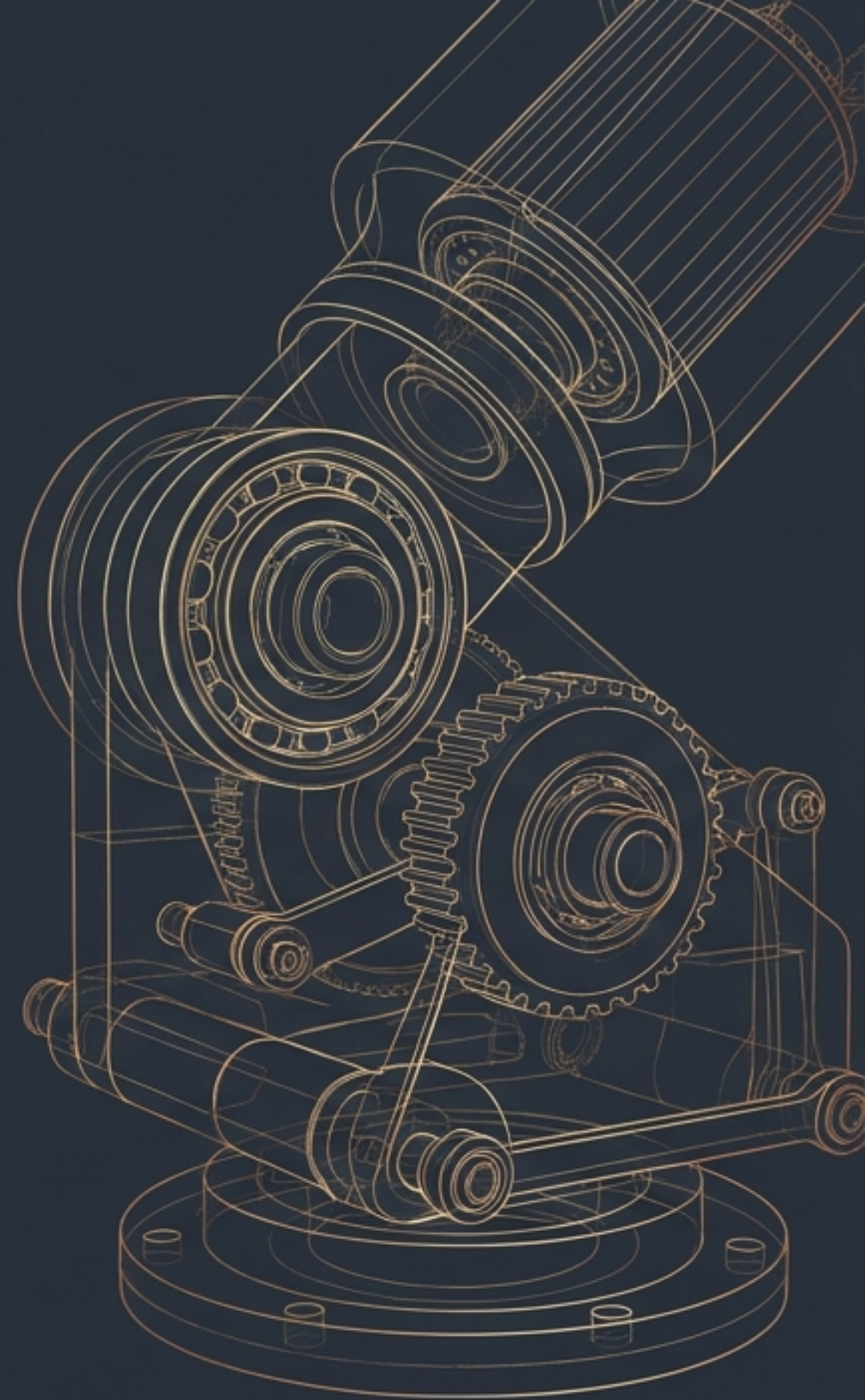
事実1（劣勢）：汎用完成品の量産・価格競争において、日本はすでに敗北状態にある（中国シェア86%）。



事実2（防衛線）：世界市場における日本の優位性は、一部の高精度部品（減速機）と特許の質に限定的に残存している。



事実3（勝ち筋）：生存と反転の鍵は「部品のモジュール化」「安全規格でのルールメイク」「特定用途データ」への集中にある。



2026年上半期の世界市場：中国勢による圧倒的な「量」の支配

世界出荷台数
22,000+台
(H1 2026, YoY +300%)

86%
中国勢上位5社の世界シェア
AgiBot, Unitree, Galbot,
UBTech, Leju

 用途の実態

出荷の6割超はエンタメ・研究・データ収集用途であり、工場での実作業需要ではない。

日本発の量産出荷はほぼゼロ。国内の羽田空港実証（JAL）等ですら、中国製機体が採用されている現実。

日米中の競争力マトリクス：「脳」の米国、「体」の中国、「関節」の日本

米国
(United States)



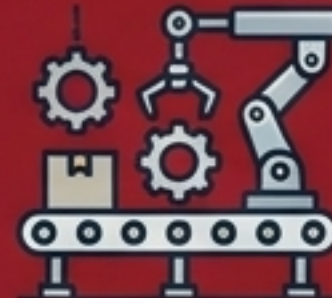
AI・基盤モデル

Physical Intelligence, Figure等。
VLAモデルで世界を圧倒。

圧倒的リスクマネー

1スタートアップで数兆円規模
の調達。民間主導の覇権。

中国
(China)



圧倒的量产と価格破壊

国家主導で年産10万台規模へ。
他国を凌駕するコスト競争力。

特許と機体の「量」

補助金に支えられた大量出願
と、大量のデータ収集網。

日本
(Japan)



重要部品の寡占

HDS・ナブテスコの減速機。高信
頼性が求められる領域での遺産。

特許の「質」

産業用ロボット企業群による強
固なポートフォリオ強度。

結論：日本は「完成品のプラットフォーム競争」から外れ、巨大なサプライチェーンの一要素へと押し込まれつつある。

日本の領域別勝敗判定ダッシュボード



- ・汎用量産・完成品
- ・AI・基盤モデル（VLA）
- ・民間資金・量産能力



- ・高負荷・高信頼の特定用途
- ・現場データ（災害・廃炉・製造）
- ・安全規格・認証ルールメイク



- ・減速機などの重要部品
- ・特許の質・ポートフォリオ

Key Insight: 日本の現在地は「局地戦でのみ優位」。
真正面からの総力戦を避け、非対称戦を仕掛ける必要がある。

脅威① 米国のAI基盤・資本覇権（スケールの非対称性）

米国 1スタートアップの評価額（Figure AI）

約5.8兆円（390億ドル）

日本の国産基盤モデル初年度予算（FRONTia）

約3,873億円

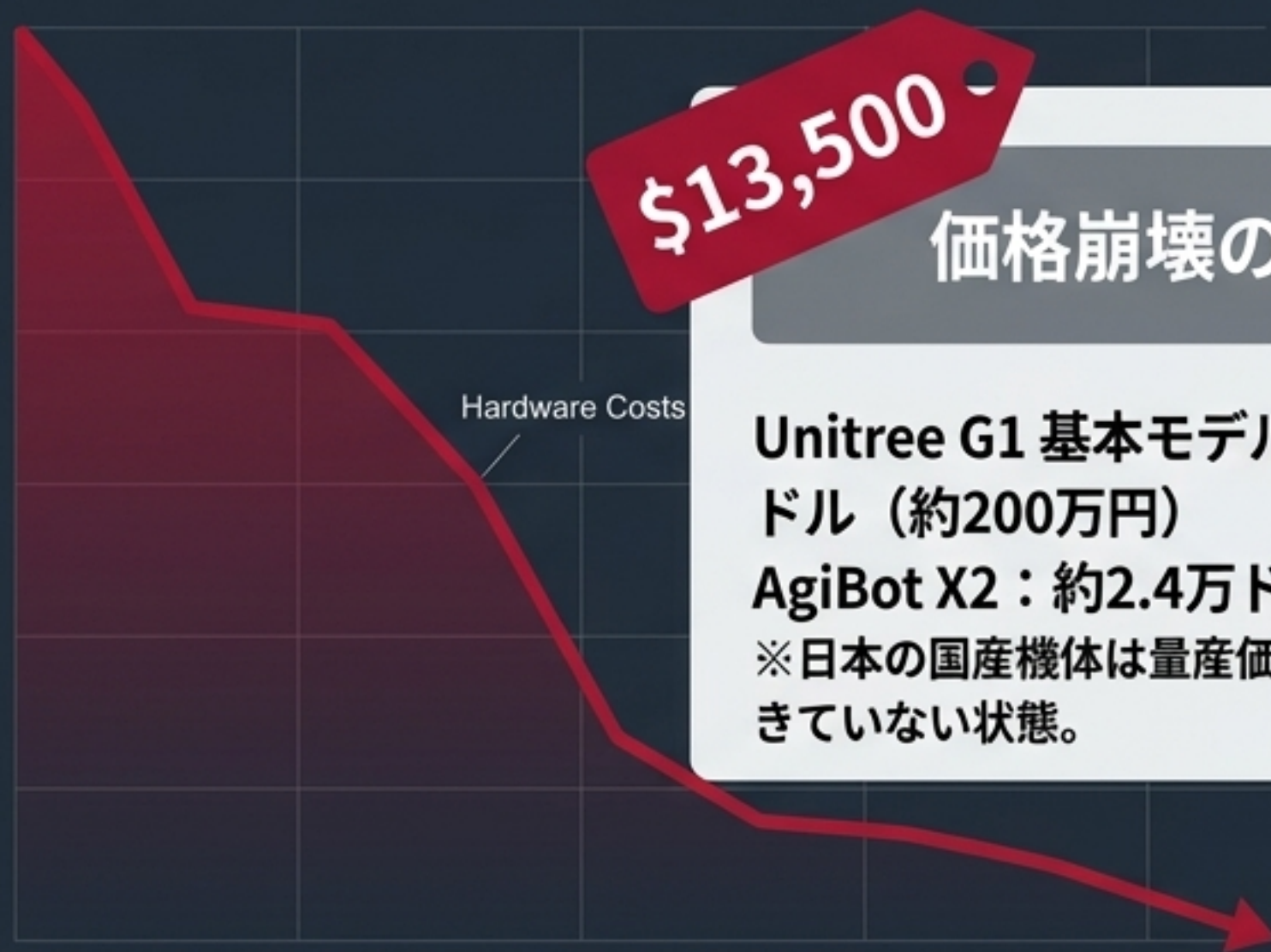
AI基盤モデルの圧倒的遅延

米国（Physical Intelligence, DeepMind等）が視覚言語行動（VLA）モデルで遙か前方を走る中、日本の国産基盤モデルは2026年7月に始動したばかり。データ蓄積で既に1～2年のビハインド。

価値源泉のシフト

ハードウェア（体）からソフトウェア・AI（脳）へと価値の中心が移行。このままでは、世界最高精度の日本のハードウェア部品も、AI企業に買い叩かれる単なるコモディティに転落する。

脅威② 中国の量産スケールと激しい価格破壊



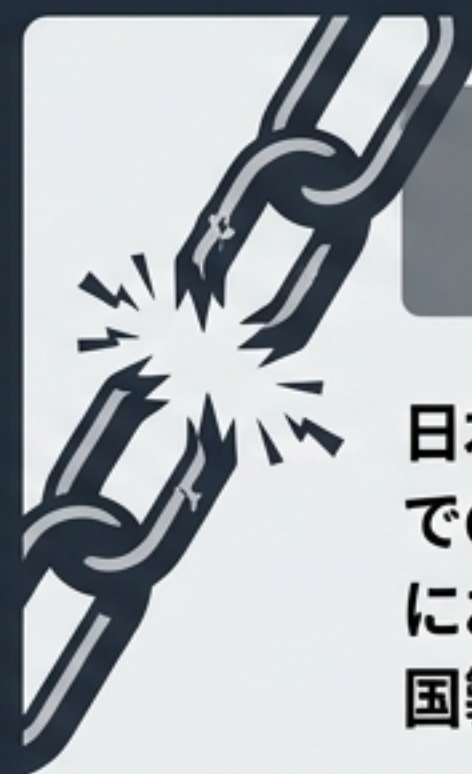
\$13,500

価格崩壊の現実

Unitree G1 基本モデル：約1.35万ドル（約200万円）

AgiBot X2：約2.4万ドル

※日本の国産機体は量産価格すら提示できていない状態。

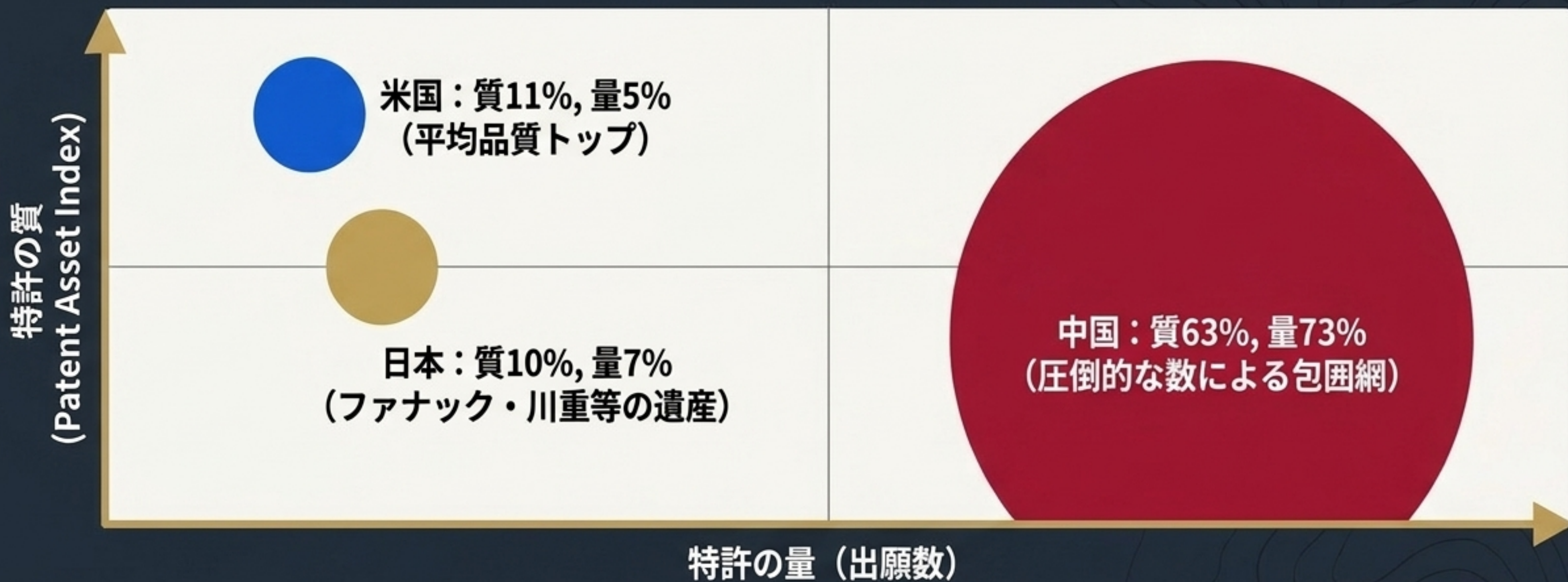


「器」の喪失リスク

日本の貴重な現場実証（羽田空港でのJALグランドハンドリング等）においてさえ、実証機体として中国製が採用されている。

構造的脅威：機体を中国に依存することで、日本が本来強みとするはずの「現場データ」や「運用ノウハウ」が、すべて中国製プラットフォーム上に吸い上げられ蓄積されてしまう。

知財のパラドックス：「量」で蹂躪する中国、「質」で孤軍奮闘する日本



致命的な弱点：日本の専門ヒューマノイド・スタートアップの有力特許はゼロ。現在は産業用ロボット時代からのレガシー企業の遺産で食いつないでいるに過ぎない。

縮小する防衛線：侵食される「減速機」の牙城

上方からの圧力（AI統合）

汎用AIの進化。ハードの微細な精度不足をソフトウェアで補正可能になり、超高精度な日本製部品のプレミアムが剥落する。

中央の牙城（現在）

HDS・ナブテスコによる減速機寡占。長期信頼性データが現在の防波堤。

下方からの圧力（中国の猛追）

Leaderdrive等の台頭。同等仕様で日本製より「40～60%安い」。
中国国内での代替が急進中。

戦略的示唆：部品単体での延命措置には、明確なタイムリミットが迫っている。

生存のための戦略的ピボット：非対称戦への転換

捨てる領域 (Red Ocean)

- ・汎用完成品の量産
 - ・低価格ハードウェア競争
 - ・基盤モデル単体での覇権争い
- 正面衝突を避ける

獲る領域 (Blue Ocean) – 独自の堀を築く 4つのPlaybook

1. 「単体部品」から「高付加価値モジュール」への進化

- ・単体部品から「高価値モジュール」への進化
- ・基盤モデルを多くサブライチュールへの進化

2. 地政学リスクを突く「脱中国サプライチェーン」の構築

- ・地政学リスクを突く「脱中国サプライチェーン」の構築
- ・地政学リスク「勝国中心の構築」
- ・地政学リスク「脱プライチェーン」の構築

3. 安全・品質の「試験・認証ルールメイク」

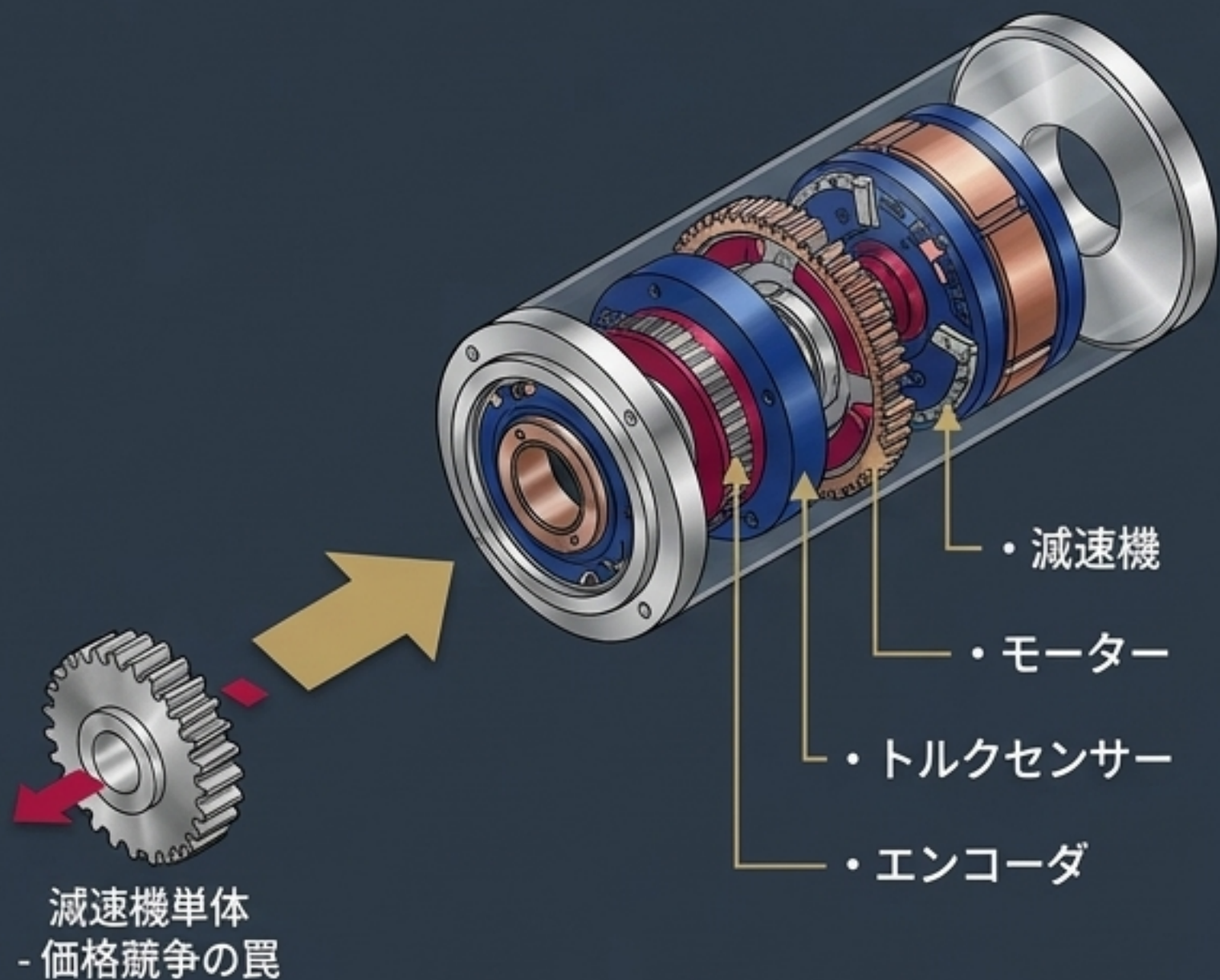
- ・安全・品質の「試験・認証ルールメイク」
- ・安全・品質の「試験・認証ルールメイク」

4. 日本固有の「ニッチ高負荷データ」の囲い込み

- ・日本固有の「ニッチ高負荷高難度データ」の囲い込み
- ・日本固有の「ニッチ高負荷データ」の囲い込み

Playbook 1：統合モジュール化と「脱中国網」の掌握

統合モジュールへの昇華



地政学ポジションの確保



Tesla、現代自動車（年3万台計画）、Figureなど、米韓の量産プログラムにおいて「経済安全保障上、中国製を使えない」という地政学的空白を、日本の高付加価値モジュールで埋める。

Playbook 2：安全規格・認証でのルールメイクビジネス

最も費用対効果の高い挽回余地：ハードの安さを認証という「関所」で回収する

現状の危機

ISO 25785-1（動的安定移動ロボット安全規格）は米国主導、中国は国家標準で先行。日本の存在感は皆無。

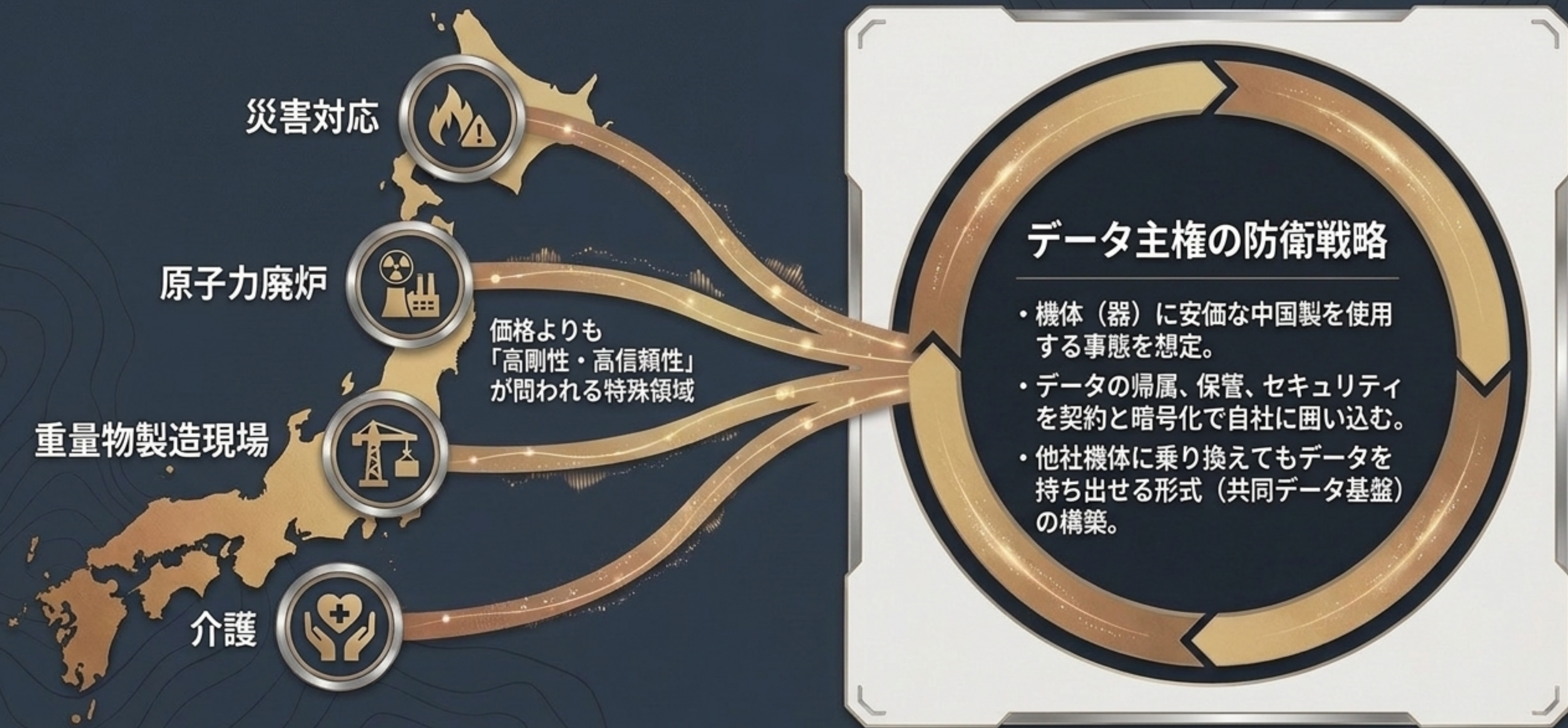
戦略的介入

日本が産業用ロボット（ISO 10218系）で培った圧倒的な安全技術の実証データを、ISO WG 12へ即時投入する。

関所ビジネス化

機体が中国製の安価なハードであっても、日本市場で稼働するための「安全認証・試験プロセス」を日本企業が握る。認証ビジネスによる利益構造の転換。

Playbook 3：特定用途への特化と「現場データ主権」の確保



知財戦略の再定義：秘匿する「城」と制圧する「市場」



CLOSED (堅牢な城)

営業秘密・ノウハウによるブラックボックス化

【対象】

減速機の方法、熱処理、歯形の微細設計、
長期の寿命・故障モードデータ。

【理由】

公開特許にすると中国企業からの模倣や回
避設計を容易にする。特許化せず、工場内の
ノウハウとして徹底秘匿する。



OPEN (開かれた市場)

標準必須特許(SEP)とライセンス戦略

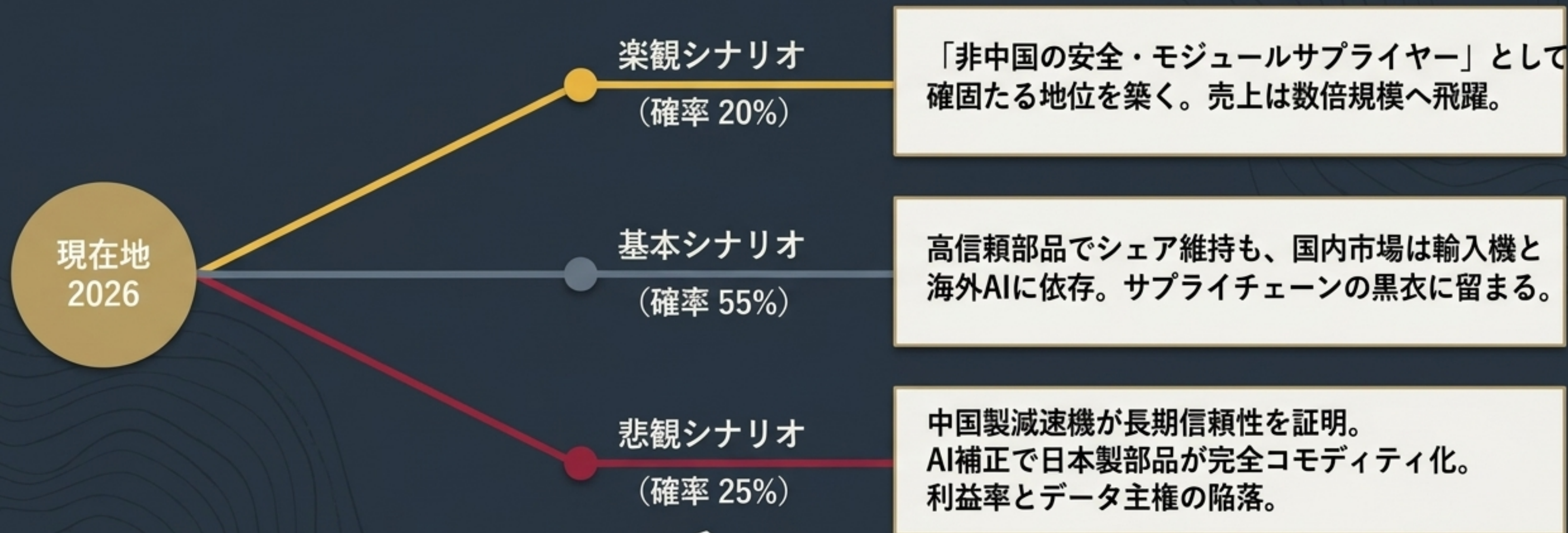
【対象】

関節モジュールのインターフェース、転倒時
の保護停止など安全機能の実装方式。

【理由】

中国の標準体系(2026年版)の差分を監視。
日本の技術が「適合手段」として必須となる
箇所に特許網を張り巡らせる。

未来シナリオ 2030-2035：生存への分岐点



【未来を分かっ鍵】

1. 中国製減速機の長期信頼性データの蓄積スピード
2. 米韓（Tesla/現代等）の量産計画の成否

Strategic Imperatives : 明日からの行動指針

部品メーカーへ

- 米韓量産プログラムへの採用を最優先KPIに設定せよ
- 単体部品の延命を諦め、関節モジュール化へ投資を即時シフトせよ

ユーザー・Slerへ

- 実証実験での中国機体使用は許容する
- ただし、データフォーマットを自社で囲い込み、プラットフォームへのロックインを絶対回避せよ

政策当局へ

- 補助金をばらまく段階は終了した
- ISO/TC 299/WG 12への即時関与でルールメイクを主導せよ
- レアアース（ネオジム磁石）調達の経済安全保障網を再構築せよ

「日本スゴイ」という幻想を捨て、非対称な地形を利用した局地戦に持ち込むこと。
それが日本に残された唯一の生存ルートである。